



年間第 33 主日 (マタイ 25:14-30)

あなたはそれをどう読んでいるのか

「早速、五タラント預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントをもうけた。」(25・16) 主人が預けたのは現金です。いろいろ複雑に考える必要も無く、それを元手に商売をするなり、貸金業をするなり、すぐ事業に取りかかれるはずでした。しかし最後の一人は何も取りかからず、責任を問われることとなります。なぜ最後の一人は主人の期待に恐れを感じたのでしょうか。

「タラント」というお金の単位は、非常に大きな単位です。その下のお金の単位は「デナリオン」とか「ドラクメ」です。これは労働者が一日に稼ぐ賃金だったと言われています。ちなみに「ムナ」という単位もあります。これは「100 デナリオン」「100 ドラクメ」ですので、基準となるのは一日の労働者の賃金である「デナリオン」ということとなります。

一タラントは 6000 デナリオンです。一年に 200 デナリオンの稼ぎとして、単純計算で 30 年分の稼ぎです。するとこの一タラントは、私が考えるに当時の人々が一生かかって稼ぎ出すお金だったと言えるでしょう。当時の人々の平均寿命を考え合わせると、30 年働くことができれば御の字だったと思います。

一つのこと気づきます。一タラント預かった人は、僕が一生働いて稼げるだけのお金を預かっている、ということ。すでに十分な資金を託されていたことを、最後の僕は見落としていました。

「かなり日がたってから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。」(25・19) 十分な資金と時間を与えられているので、何らかの結果を出していなければなりません。預けたお金のほかに何も差し出すものがないというのは、言い訳にならないということです。

振り返って私はゾッとします。「それぞれの力に応じて、一人には五タラント、一人には二タラント、もう一人には一タラントを預けた」(25・15) 私の同期は、それぞれ三つの教会の助任司祭となり、私は浦上教会の助任司祭でした。私は何タラント預かって、この司祭職をスタートさせたのだろうか？そう思った時、ゾットしたのです。

私がイエス・キリストと精算をする日に、何をお返しできるのだろうか。そもそも何タラント預かっていて、どれくらい儲けて主人に差し出さなければならぬのでしょうか。どうひいき目に見ても、浦上教会は他の教会の二倍、三倍の経験を毎年積んでいきます。出会う人の数、出会う人の種類も、他のどの教会よりも中身が濃いものになります。浦上教会助任から出発したのですから、私がお返ししなければならぬ分は、他の同期の何倍も求められて当然です。今の自分の姿を鏡に映しながら、ため息をついたのでした。

今日の福音を、朗読箇所からではないのですが、イエスの次のことばで見渡すとよいかも知れません。「律法には何と書いてあるか。あな

たはそれをどう読んでいるか」(ルカ 10・26)。これはルカ福音書の「善いサマリア人」のたとえを使って律法の専門家と対話する時に言われたことばです。私たちはこれを、「あなたは今日のたとえ話をどう読んでいるか？」と受けとめる。そうすると、見えてくるもの、響いてくることがあるのではないのでしょうか。

「ここには何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか。」私は、司祭として歩み始めた時に五タラントンをいただいたに違いない。その五タラントンを元手に、神の国の喜びにあずかる人をどれだけ儲けたらろうか。「これがあなたのお金です」と責任逃れをし、託された多くの恵みを神の喜びのために使わなかった点を問われるかも知れません。

私たちはどうでしょうか。少なくとも私たちは、人が一生涯で手に入れることのできるタラントンを、神から託されて生きています。それが 6000 デナリオンでなくても一向に構いません。ある人は生まれた時から寝たきりですが、その人の生涯で手に入れることのできるすべてを、前もって託されているのです。託されたものを使って、私たちは神にお返しできる人生を生きてきたのでしょうか。

ある人はこう言うかも知れません。「私は自分のことで手一杯でした。さらに貯蓄して、さらに増やして、神さまにお返しする余裕なんてどこにもありませんでしたよ。」本当にそうでしょうか。

中田神父は、出会った時から長崎市の原爆病院に入院し、一步も動けなかった人を知っています。その人はお見舞いに行くとしばしば新しいカトリック信者の紹介をしてくれました。「何階の何号室に、カトリックの人が入りました。よかったら訪ねてください。」

この人は「預かった命」というタラントンを活用して、神さまの喜ぶ儲けを生み出していたのです。そして、ある日訪ねたら居なくなっていて、詰め所の看護師に聞くと亡くなったということでした。

寝たきりの人ですから、預けられたタラントンはそう多くなかったかも知れません。けれどもその人は立派に儲けを出して、旅立っていったのでした。私たちが神さまから託されたものをどのように使うべきか、考えるお手本と言えるでしょう。

神は、誰に対しても預けたものの精算をします。預かったのにホコリを被ったままにしておくのか、預かったものを積極的に運用するのか、私たちの答えを楽しみにしておられます。それを「厳しい方」と受け取るのか、「楽しみに待っておられる方」と受け取るのかは自分次第です。私は、病院で出会った高齢の女性を通して、「神は私たちの応答を楽しみに待っておられる」と信じております。